

# マリヴォー『愛と偶然の戯れ』における作中人物による演出

田地 志帆

## はじめに

『愛と偶然の戯れ』 *Le Jeu de l'amour et du hasard* は1730年1月23日イタリア人劇団によって初演され好評を博したマリヴォーの代表作である。主人公シルヴィアに変装することを許す父親のオルゴン氏について、当時の一般的な父親に比べてかなり寛大な父親であるという指摘が既に見られる<sup>1)</sup>。しかし、オルゴン氏は娘のためだけを思って提案を受け入れたのだろうか？この決断は、娘の幸せを考える演技者としての父親の立場からなされると同時に、面白い芝居を演出して楽しもうとする、劇中劇の演出家の立場から導き出されたものと考えられないだろうか<sup>2)</sup>。本稿は『愛と偶然の戯れ』におけるオルゴン氏の役割について、兄のマリオとの比較も通して考えていく。

## 1. 演技者

まず演技者として父親の役割を与えられたオルゴン氏は寛大な人物として描かれており、娘に対して優しく、様々なことに許しを与える。

MONSIEUR ORGON : Parle, si la chose est faisable je te l'accorde.

SILVIA : Elle est très faisable ; mais je crains que ce ne soit abuser de vos bontés.

MONSIEUR ORGON : Eh bien, abuse, va, dans ce monde, il faut être un peu trop bon pour  
l'être assez. (p.615)

オルゴン氏 話してごらん、出来ることなら許してあげるから。

シルヴィア それは出来ることですが、お父様の優しさにつけ込むことにならないかと。

オルゴン氏 じゃあつけ込んだらいい。人間はね、十分優しくなるためには少し優しくすぎるくらいじゃないといけないんだから。

また、18世紀の社会では、娘が身分の低いものと結婚することは世間での父親の評判を落とすものであり、身分の釣り合わない結婚を避けるために父親が娘の結婚相手としてふさわしい人を選び、娘はそれに従って結婚するのが一般的であった<sup>3)</sup>。しかしオルゴン氏は当時の一般的な父親の枠組みに収まっていない。親同士の話し合いによって子どもの結婚相手を決めてくるところまでは当時の常識に従っている

が、縁談をまとめる際に二つの条件を始めから設けている。

MONSIEUR ORGON : Allons, allons, il n'est pas question de tout cela ; tiens, ma chère enfant, tu sais combien je t'aime. Dorante vient pour t'épouser ; dans le dernier voyage que je fis en province, j'arrêtai ce mariage-là avec son père, qui est mon intime et mon ancien ami, mais ce fut à condition que vous vous plairiez à tous deux, et que vous auriez entière liberté de vous expliquer là-dessus ; je te défends toute complaisance à mon égard : si Dorante ne te convient point, tu n'as qu'à le dire, et il repart ; si tu ne lui convenais pas, il repart de même. (p.615)

オルゴン氏　まあいい、まあいい、そんなことは問題じゃないんだ。ねえ、シルヴィア、私がどれだけお前を愛しているか知っているね。ドラントはお前と結婚するためにやって来る。最近田舎に旅行したときに、私の親友かつ旧友であるドラントの父親とこの結婚を取り決めたんだ。でもこれはお前たち二人が互いに気に入るという条件、そして気持ちを表明するのに完全な自由を与えるという条件の下でされるんだ。私に気兼ねすることは禁止するよ。もしドラントがお前の気に入らなければ、お前はそう言いさえすればいい。彼は帰っていくから。もしお前がドラントの気に入らなければ、彼はやっぱり帰っていくんだ。

このように結婚を強制せずに選択する自由を与えている点で違いが見られる。またドラントに会ったことのないオルゴン氏は、召使いという偽りの姿であっても必ず娘の目に留まるという確証を持っていたわけではない。シルヴィアの変装のアイデアは身分違いの結婚を引き起こす可能性もあると考えられるが、オルゴン氏は自らの名声を失うリスクを背負いながらも娘の提案を了承している。そしてすでに指摘されているように、オルゴン氏は一家の主として権力を持ち、召使いに対する影響力も持っているが、Claude Eterstein がモリエール作品に登場する家庭内の専制君主のような主人と比べて言うように、決して横暴ではない<sup>4)</sup>。家族だけでなく召使いに対しても寛大さを示している。以上のことから演技者オルゴン氏は娘思いで寛大な父親だと言えるだろう。

## 2. 演出家

オルゴン氏はドラントの父親から息子の変装を明かす手紙を受け取っており、ドラントの計画を知った上で、偶然にも同じ内容であるシルヴィアの計画を受け入れる。オルゴン氏のこの決断は、娘を思う親心からである一方、二重の変装によって面白いことが起こるだろうと予測しているからでもある。

MONSIEUR ORGON, *à part* : Son idée est plaisante. (*Haut.*) Laisse-moi rêver un peu à ce que tu me dis là. (*À part.*) Si je la laisse faire, il doit arriver quelque chose de bien singulier, elle ne s'y attend pas elle-même... (*Haut.*) Soit, ma fille, je te permets le

déguisement. Es-tu bien sûre de soutenir le tien, Lisette ?

(p.616)

オルゴン氏 (傍白) 面白い思いつきだ。(普通に) お前が言ったこと、少し考えさせてほしい。(傍白) もしこの子のやりたいようにさせておいたら、かなり奇妙なことが起こるに違いない。本人さえ予期しないことが…。(普通に) いいよ、シルヴィア、変装を許そう。リゼット、お前のほうは自分の役をちゃんとできるかい？

全登場人物のうち、オルゴン氏とマリオの二人だけが二重の変装という物語の全容を知っている。二人はドラントも変装して来るということをシルヴィアに打ち明けるべきか話し合った結果、言わないでおくことに決める。つまり、この二重の変装という状況はマリオの助言を受けたオルゴン氏の決断によって作り出されたものであるとも言えるだろう。もちろん婚約者の二人が同時に同じ策略を試みるというのは偶然の結果であるが、娘の変装を許し、相手の変装を隠しておくことにしたオルゴン氏によって条件が整えられたのだ。

また、オルゴン氏とマリオは変装した二人の恋の行方を予想し、その様子を見て楽しもうとしている。当事者たちにとっては将来がかかった真面目な問題であるが、オルゴン氏とマリオは結婚に至るまでの過程の芝居を観て気晴らしをするような姿勢で関わっていく。

MONSIEUR ORGON : [...] Ce n'est pas le tout, voici ce qui arrive ; c'est que votre sœur, inquiète de son côté sur le chapitre de Dorante, dont elle ignore le secret, m'a demandé de jouer ici la même comédie, et cela précisément pour observer Dorante, comme Dorante veut l'observer, qu'en dites-vous ? Savez-vous rien de plus particulier que cela ? Actuellement, la maîtresse et la suivante se travestissent. Que me conseillez-vous, Mario ? Avertirai-je votre sœur ou non ?

MARIO : Ma foi, Monsieur, puisque les choses prennent ce train-là, je ne voudrais pas les déranger, et je respecterais l'idée qui leur est inspirée à l'un et à l'autre ; il faudra bien qu'ils se parlent souvent tous deux sous ce déguisement, voyons si leur cœur ne les avertirait pas de ce qu'ils valent. Peut-être que Dorante prendra du goût pour ma sœur, toute soubrette qu'elle sera, et cela serait charmant pour elle.

MONSIEUR ORGON : Nous verrons un peu comment elle se tirera d'intrigue.

MARIO : C'est une aventure qui ne saurait manquer de nous divertir, je veux me trouver au début, et les agacer tous deux. (p.617)

オルゴン氏 [...]それだけじゃない、こんなことが起こったんだ。シルヴィアが、彼女のほうもドラントのことについて不安を抱いて、もちろんドラントの企みは知らないんだが、同じ芝居をやらせてくれと言うんだ。それも、ドラントがシルヴィアを観察したいと思っているのと言い合わせたように、ドラントを観察するためと言うんだ。どう思うかい？これほど変わったことがあるだろうか？今、令嬢と侍女は役を交換しているところだ。マリオ、助言してくれないか？

シルヴィアに知らせようか、黙っておこうか？

マリオ そりゃあ、お父さん、事がここに至ったのだから、僕は彼らの邪魔はしたくないし、彼らにひらめいた考えを尊重しようと思います。この変装でたくさん二人で話すといいでしょう。二人の心がお互いに真の値打ちを感じるかどうか、見ていましょう。おそらくドラントはシルヴィアを好きになるでしょう、彼女が侍女になっけていても。そしてそれはシルヴィアにとって嬉しいことでしょう。

オルゴン氏 シルヴィアがどのように企みを乗り切っていくか、少し見ていよう。

マリオ 僕たちを楽しませることができると事件ですよ。僕は幕開きに立ち会って、少し二人を困らせてやりましょう。

娘たちがこれから繰り広げる芝居を娯楽として見ていきたいと思う一方、父親としては身分違いの結婚に陥るような事態は何としても避けたいことである。そこで階級の同じ者同士が結びつくように、演出家の立場に身を置いてこの変装劇を導いていく。演出家としてオルゴン氏は他の演技者に対し、特にシルヴィアに自分の思い描く行動以外させないようにしている。まず、ドラントに扮するアルルカンの粗野な振る舞いにあきれて計画を断念しようとするシルヴィアのことを避け、話しかける隙を与えない。「やめたい」と父親に言い出せないシルヴィアは結果的に変装を続けざるを得なくなる。

SILVIA : Êtes-vous folle avec votre examen ? est-il nécessaire de le voir deux fois pour juger du peu de convenance ? En un mot, je n'en veux point. Apparemment que mon père n'approuve pas la répugnance qu'il me voit, car il me fuit, et ne me dit mot ; dans cette conjoncture, c'est à vous à me tirer tout doucement d'affaire, en témoignant adroitement à ce jeune homme que vous n'êtes pas dans le goût de l'épouser. (p.632)

シルヴィア 調査って、あなた馬鹿なの？釣り合っていないと判断するのに二度も会う必要があるかしら？要するに、私あの人嫌なの。でもお父様は私の気持ちを分かっているながら同感していないようなの。私を避けて一言も口をきいてくれないんだもの。だからこの際あなたが、この結婚に気乗りがしないということをおの人に上手く分からせて、当たり障りのないように、私をこのことから抜け出させてほしいの。

このように自らの態度や振舞いによって間接的に思い描く展開に持っていこうと試みている。それだけでなく、シルヴィアの変装を続けさせるためにリゼットにくっつかの指示を与え、直接的にも軌道修正を行っている。例えば、ドラント（実際にはアルルカン）をはねつけるようにとシルヴィアに指示されても聞かないようにさせて、演技を引き伸ばそうとしている。

LISETTE : Nous n'avons encore guère trouvé le moment de nous parler, car ce prétendu m'obsède ; mais à vue de pays, je ne la crois pas contente, je la trouve triste, rêveuse,

et je m'attends bien qu'elle me priera de le rebuter.

MONSIEUR ORGON : Et moi, je te le défends ; j'évite de m'expliquer avec elle, j'ai mes raisons pour faire durer ce déguisement ; je veux qu'elle examine son futur plus à loisir. Mais le valet, comment se gouverne-t-il ? ne se mêle-t-il pas d'aimer ma fille ?

(p.627)

リゼット お嬢様とはあまりお話する時間がありませんでした。なにしろお婿様が私の後を追ってばかりいらっしやるので。でもお見受けしたところ、お嬢様は満足していらっしやらないようです。悲しそうで、沈んでいらっしやるようです。お嬢様は私に、ドラント様をはねつけるようにと頼まれるのではないかと思います。

オルゴン氏 だが、それは私が禁じる。私は娘に話をすることは避けるけど、この変装を続けさせるほうがいいと思うからなんだ。私は娘にもっと心ゆくまで、未来の夫のことを調べてもらいたいと思う。それで召使いのほうはどうしてるかい？うちの娘に色目を使うなんてことはないかい？

実際にオルゴン氏の言動によってシルヴィアの行動は制限されている。リゼットもオルゴン氏の言いつけを守っているため、リゼットに主人を装うアルルカンを拒ませて演技を終わらせたいシルヴィアの指示には従わない。父親と話す機会が得られず、召し使いは言うことを聞かないため、シルヴィアは変装をやめることができない。シルヴィアの思い通りにならないのは、演技を放棄することを許さないオルゴン氏に変装を続けさせるように根回しした結果である。現にシルヴィアはオルゴン氏の存在がなければ変装を途中で放棄する可能性もあったと打ち明けている。

SILVIA : C'est que je suis bien lasse de mon personnage, et je me serais déjà démasquée si je n'avais pas craint de fâcher mon père. (p.638)

シルヴィア 私は自分の役割がいやになりました。お父様のご機嫌を損ねる心配がなければ、もうすでに正体を現していたことでしょう。

このように父親の力は実際に娘の行動に制限を与えているが、その力の及ぼす影響は娘だけに止まらない。オルゴン氏は四人の恋を応援するために主人側にも召し使い側にも働きかける。第二幕第一景でリゼットから相談を受けた際、オルゴン氏は彼女の恋を応援することで召使い同士のカップルを成立させようとしている。そしてリゼットとアルルカンの恋が順調に進んでいるところをシルヴィア、ドラントに見せることで二人の気持ちを動かそうとしているとも考えられる。そしてシルヴィアやドラントにも直接声をかけ、助言し、励ますことで、自分の思うような結果にたどり着くように裏で糸を引いている。このように少し介入しながら演出家として物語を陰で操っている。

MONSIEUR ORGON : Vous vous convenez parfaitement bien tous deux ; mais j'ai à te dire un mot, Lisette, et vous reprendrez votre conversation quand nous serons partis : vous le voulez bien, Bourguignon ? (p.637)

オルゴン氏 二人ともとてもよく似合っているよ。リゼット、私はお前に言うことがあるんだ。君たちは私たちが立ち去った後で話を続けられればいい。それでいいかい、ブルギニョン？

また、シルヴィアの中に芽生えたドラントに惹かれる気持ちに気づかせるために、オルゴン氏は「噂」という罟を仕組む。まずリゼットに指示し、「ブルギニョンは自分が仕えている主人のことを悪く言っているのではないか」と疑いをかけさせる。

MONSIEUR ORGON : Eh bien, quand tu lui parleras, dis-lui que tu soupçonnes ce valet de la prévenir contre son maître ; et si elle se fâche, ne t'en inquiète point, ce sont mes affaires : mais voici Dorante qui te cherche apparemment. (p.627)

オルゴン氏 じゃあ、シルヴィアと話すときには、あの召使いはあの子に主人のことを悪く吹き込んでいるらしいと言ってやりなさい。それでシルヴィアが怒っても、お前は心配しなくていい。それは私の問題だから。だがドラントが来た。お前を探しているんだろう。

ドラントに対するリゼットの疑いは、父親の予想通りシルヴィアの怒りを買う。追い討ちをかけるように、オルゴン氏は自分自身でもシルヴィアにこの噂について問いかける。シルヴィアはつい必死になってドラントをかばい、マリオにからかわれることとなる。

MONSIEUR ORGON : C'est donc ce garçon qui vient de sortir qui t'inspire cette extrême antipathie que tu as pour son maître ? (p.637)

オルゴン氏 じゃあ今出て行ったあの若者かい？お前があの主人について持っている極端な反感を抱かせたのは？

MONSIEUR ORGON : Cependant, on prétend que c'est lui qui le détruit auprès de toi, et c'est sur quoi j'étais bien aise de te parler. (p.638)

オルゴン氏 しかし、あの男はお前に対して主人の信用を落とそうとしていると言われていたんだ。それについて私はお前とぜひ話がしたいと思っていたんだ。

このようにオルゴン氏は、シルヴィアの本心を明らかにしようと画策する。また、オルゴン氏は演出家として娘たちの恋の結末を思い描いており、マリオとともにそれを予見するような言葉を残している。

MONSIEUR ORGON : La seule chose que j'exige de toi, ma fille, c'est de ne te déterminer à le refuser qu'avec connaissance de cause ; attends encore, tu me remercieras du délai

que je demande, je t'en réponds.

MARIO : Tu épouseras Dorante, et même avec inclination, je te le prédis... Mais, mon père, je vous demande grâce pour le valet. (p.640)

オルゴン氏 シルヴィア、私がお前に求めることはただ一つ、それは物事がよく分かるまでドラントを断る決心をしないということだ。もう少し待ちなさい。お前は後にきっと私の求める延期に感謝することだろう。請け合うよ。

マリオ お前はドラントと結婚するよ。しかも好きになってね。僕は予言しておく…。でもお父様、あの召使いのことは勘弁してもらえませんか？

第二幕の終わりにドラントが変装していたという真実を知ったシルヴィアは、第三幕からドラントを試練にかける。ここでオルゴン氏の演出家としての役割は終わり、演技者としての父親の立場から娘の行動を見守り続けることになる。

### 3. オルゴン氏とマリオ

この作品の中でオルゴン氏とマリオは物語の全容を知っている。つまり登場人物の中でこの二人だけが変装した四人全員の正体と変装劇のからくりを知っている。『愛と偶然の戯れ』を演じる役者でありながら、二重の変装が生み出す劇中劇を客観的に眺める父親と兄は、観客と同じように芝居全体を把握できるような位置に身を置いており、いわば「全知の演技者」となっている。しかし、二重の変装の秘密を初めから知っているのはオルゴン氏のみだということは注目すべき点である。オルゴン氏はマリオにドラントの変装をシルヴィアに打ち明けるべきか相談するために、状況を説明して秘密を明かしていおり、二人は対等な立場ではない。物語全体を見渡せるヒエラルキーの上層部を二人で陣取っているが、オルゴン氏の方がマリオよりも高位に立っている。

この二人の立場の相違点として、①介入の程度、②指示・判断の有無、③自分を偽る演技の有無の三点が考えられる。第一幕第五景のドラントとシルヴィアが初めて顔を合わせる場面から、マリオは二人をからかい、積極的に話の筋に介入していくのに対して、オルゴン氏は一歩引いたところから、時を見計らって言葉をかける。この例のようにマリオはからかうことによって、つまりは言葉によってのみシルヴィアやドラントを刺激する<sup>5)</sup>。しかしオルゴン氏はからかいではなく直接的な指示を出して登場人物を動かす。シルヴィアたちの変装後、召し使いに実質的効力を持った指示を出しているのはオルゴン氏ただ一人である。そして先に述べたようにオルゴン氏は言葉だけでなく態度によっても人を動かしているが、一方のマリオは動かされる側に位置付けられており、父親の意を酌んで行動し、妹の指示にも従う。また、マリオは召し使いに扮したシルヴィアに恋するという自分を偽る演技をする

が、オルゴン氏にこのような演技は見られない。

このように、父親のオルゴン氏は指示を出すことで直接的にも人を動かし、演出家としての役割を持っている。それに対して、兄のマリオはからかうことで主人公を刺激するが、あくまでも演技者に止まっている。話の流れを決めるのはオルゴン氏であり、マリオはその決まった流れに沿って物語が進行するように努めている。しかし、他の登場人物を動かし、導こうとする点は二人に共通する。オルゴン氏は外側から、マリオは内側から、劇中劇の役者たちに演技指導をしていく。第二幕第九景の終わりから第十景の初めにかけて、オルゴン氏とマリオは舞台に上がり、黙ったままシルヴィアとドラントを見守っており、劇の進行状況を一緒に確認している場面であると言える。このように二人は協力関係にあるのだ。

## おわりに

オルゴン氏に父親役の演技者と劇中劇の演出家の二つの役割を与えたように、マリヴォーは登場人物一人に複数の役割を与えているが、この意図としては多面的な人物を描くためだと考えられる。実際、ある一つの特徴だけで一人の人間を言い表すことが出来るだろうか？人間はそれほど単純ではない。それぞれ様々な側面を持ち、複雑な感情を抱くものである。観察者マリヴォーはそれを踏まえ、登場人物に複数の役割を持たせてより人間らしく厚みのある人物を描いたのだろう<sup>6)</sup>。

また、一家の父親と劇団の演出家を重ね合わせることで、マリヴォーは自身の演劇観を作品に潜ませている。演劇を生み出すのは脚本家や演出家であるが、演出家一人で演劇を作ることは出来ない。演じることで初めて形になる、つまり演技者がいるからこそ演劇が成り立つ。しかし演技者がいつも思い通りの動きをしてくれるとは限らず、完全に自由に役者に任せていると、想定したものと懸け離れた劇が出来上がる可能性もある。そのため作家の構想通りに作品を作り上げるには、演じる役者たちに演技指導を与えなければならない。『愛と偶然の戯れ』の場合を考えると、オルゴン氏は演技者から少し距離をとって間接的な方法で変装劇に手を加えていくが、マリオは自ら劇の中に入って直接的に演技者と関わる。つまり、オルゴン氏は外側から、マリオは内側から演技指導をして演技者たちを操り、物語を展開させている。このように、思い描いた通りの芝居を実現させるには外と内の二方向からの演技指導が必要であり、内側からの指導を加えるためには演技に直接介入していかない演出家の意図を十分に理解し行動してくれる役者に協力者となってもらわなければならないのだ。その点を考えれば、演出家の役割を果たすオルゴン氏の意図をくみ、期待された仕事を忠実にこなすマリオは最高の演技者かつ最高の協力者だろう。演出家



と優秀な役者の協力関係によって成り立つこの演出方法がマリヴォーの理想だったのかもしれない。

また、オルゴン氏はシルヴィアに変装し観察する自由を与えているが、陰で操って行動を制限している。言い換えれば、オルゴン氏は完全ではない限られた自由を与えている。この制限のある自由は、マリヴォーが多くの作品を提供したイタリア人劇団の得意とする即興劇を連想させる。新イタリア人劇団の座長で、俳優、作家、批評家も兼ねるルイジ・リッコポーニは *Histoire du théâtre italien* の中で即興劇の特徴について次のように述べている<sup>7)</sup>。「即興劇を演じる役者は与えられた役を演じる役者より、自然に生き生きと演技する。[...] しかしこの即興劇の強みは、多くの難点によって手に入れているものだ。即興劇の役者には器用さと、全員に同じ程度の才能が要求される。即興劇の不幸は、役者の演技の良し悪しが会話する相手によることだ。」このリッコポーニの理論を発展させたのがオルゴン氏の手法ではないだろうか。筋書きだけを用意して役者たちに任せて即興で演じさせることには、臨場感のある生き生きした演技が引き出せる可能性がある反面、劇作家の想定から外れた演技を生み出すリスクもある。そこでもし作家と考えやイメージを共有し、他の役者の演技を良い方向に導くことのできる協力者を投入すればどうだろうか。長所である臨場感を損なうことなく、思惑が外れるリスクを軽減することができるだろう。オルゴン氏は変装した二組のカップルの恋愛模様という筋書きを用意して、自然で生き生きした演技を引出し、信頼を置いている優秀な役者マリオを投入することでより良い劇を作り出そうとしたのだ。オルゴン氏は即興劇の要素を取り入れ、長所を生かしながら短所を出来るだけ除くように改良を加えた演出家だと言えるだろう。信頼できる演技者ととともにこそ演出家が思い描く通りの、自然で生き生きとした演劇を作り出すことができる。それこそが理想的な演劇の作り方だとマリヴォーは考えたのではないだろうか。

また最近発表された山下裕大氏の論文において、オルゴン氏とマリオの持つ「観客」の性格と「劇作家」の性格が指摘されており<sup>8)</sup>、図らずも内容が近づいてしまった。しかし本稿の目的は、演出をするオルゴン氏とそれに協力する演技者のマリオとの関係性を考えること、そしてそこにマリヴォーの演劇観を見出すことにあり、方向性が異なることを断っておく。今後は他作品における登場人物による演出についても併せて検討し、マリヴォーの演劇観に迫っていきたいと考えている。

## 注

本稿の引用は全て Marivaux, *Théâtre complet*, tome I, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1993 から行い、本文中に直接ページを示す。また邦訳は進藤誠一訳を参照させていただいた。

- 1) Marivaux, *Théâtre complet*, tome I, « Bibliothèque de la Pléiade », Gallimard, 1993, p.1122 参照。
- 2) 秩序を守りながら恋愛結婚をさせるオルゴン氏は物語の進行役 *meneur de jeu* であると Emmanuelle Malhappe によって指摘されている。Marivaux, *Le Jeu de l'amour et du hasard Présentation par Emmanuelle Malhappe*, GF Flammarion, 1999, p.155 参照。
- 3) Jean-Benoît Hutier, *Maîtres et valets dans la comédie du XVIIIe siècle*, Hatier, 1999, p.60  
Claude Eterstein, *Le Jeu de l'amour et du hasard, Marivaux*, Hatier, 1984, p.34 参照。
- 4) Claude Eterstein, *Le Jeu de l'amour et du hasard, Marivaux*, Hatier, 1984, pp.34-35 参照。
- 5) Claude Eterstein はマリオとキューピッドを比較し、ドラントとシルヴィアの恋を巧みに刺激する存在であると示している。 *Ibid.*, p.36 参照。
- 6) 小場瀬卓三氏は『愛と偶然の戯れ』のものわりのいい父親に『タルチュフ』の愚かで頑固な父親と同じオルゴンという名前を与えているのは、マリヴォーのモリエールに対するあてこすりであると指摘している。マリヴォー・ポーマルシェ『マリヴォー／ポーマルシェ名作集』、小場瀬卓三・田中栄一・佐藤実枝・鈴木康司訳、白水社、1977、p.490 参照。モリエール作品の人物が性格のある一面を誇張して描かれていることを考えても、マリヴォーの「モリエール嫌い」が見て取れるだろう。
- 7) Luigi Riccoboni, *Histoire du théâtre italien : depuis la decadence de la comedie latine ; avec un catalogue des tragedies et comedies italiennes imprimées depuis l'an 1500 jusqu'à l'an 1660 ; et une dissertation sur la tragedie moderne*, tome I, Cailleau, 1730, pp.61-63  
<[https://books.google.co.jp/books?id=q7ETAAAAQAAJ&printsec=frontcover&source=gbs\\_ge\\_summary\\_r&cad=0#v=onepage&q&f=false](https://books.google.co.jp/books?id=q7ETAAAAQAAJ&printsec=frontcover&source=gbs_ge_summary_r&cad=0#v=onepage&q&f=false)>  
なお、引用文中の下線は引用者による。
- 8) 山下裕大「マリヴォー『愛と偶然の戯れ』における身分差と恋愛心理」、京都大学フランス語学フランス文学研究会紀要『仏文研究』、第 46 号、2015、pp.167-178

Marivaux, *Le Jeu de l'amour et du hasard*  
— Manipulés et manipulateur —

Shiho TAJI

Dans le chef-d'œuvre de Marivaux, *Le Jeu de l'amour et du hasard*, Monsieur Orgon est le père généreux de Silvia, l'héroïne de cette comédie. Bienveillant, il laisse sa fille libre de choisir et lui permet de se travestir. Mais ce n'est pas dans le seul but qu'elle fasse un mariage heureux, c'est aussi pour se divertir du stratagème qu'elle a monté. En espérant qu'il arrivera quelque chose d'imprévu et d'amusant, il accepte cette intrigue identique à celle de Dorante, le prétendant de Silvia. Cependant, il faut éviter la mésalliance qui rabaisserait son niveau social ; il devient donc le metteur en scène de cette comédie. Par son comportement, ses suggestions ou encouragements, il manipule les actions et les amours des quatre personnages afin de mener l'affaire vers un heureux dénouement.

Mario également, quand il taquine Silvia pour lui faire remarquer son affection pour Dorante, a une influence sur la psychologie de sa sœur, ce qui la pousse à agir en conséquence. Et M. Orgon et Mario sont les seuls à comprendre la situation des quatre travestissements. Ils partagent entre eux ce secret et en jouissent. Mais, Marivaux a placé M. Orgon à un niveau supérieur par rapport à Mario. Ce dernier le rôle que lui a attribué son père et reste l'un des acteurs d'une *comédie* interne à la pièce. Collaborateur du metteur en scène, Mario intervient entre les protagonistes et les aiguillonne pour que l'intrigue imaginée par son père se déroule selon le plan prévu.

En dehors du scénario ou de la mise en scène, la réalisation d'une comédie idéale repose sur le jeu des acteurs. Cependant les acteurs ne suivent pas toujours l'idée du dramaturge. Se rapprocher de l'idéal demande une double direction : l'une menée de l'extérieure, par le réalisateur, et l'autre de l'intérieure par un acteur doué. Ici M. Orgon adopte des traits de l'impromptu pour en tirer un jeu plus naturel et plus vif. En laissant une liberté limitée aux protagonistes, il les conduit selon son canevas en collaboration avec le meilleur acteur, Mario.

En conclusion, on peut se demander si Marivaux n'a pas, de la sorte, pensé qu'il fallait coopérer avec des acteurs compétents pour faire de sa pièce une comédie idéale, vivace comme l'impromptu.